

保育に関する授業の女子高校生に対する影響 —子どものイメージの変化—

炭谷靖子¹，成瀬優知²，村山正子²

¹富山医科薬科大学大学院医学系研究科看護学専攻修士課程

²富山医科薬科大学医学部看護学科地域・老人看護学講座

要 約

地域保健分野で思春期に対する母子保健の取り組みがなされている。また、家庭科教育でも母子に関する教育が行われており、学校教育との効果的な連携が望まれる。

そこで、授業（家庭科・保育）の子供イメージへの効果を知ることを目的として授業前後の子供イメージを Semantic Differential Method (SD法) を用いて調査した。

対象は、T高等学校普通科2年生女子157名中、保育の授業の開始前と終了後の2度の調査用紙の照合が可能であり、全項目に回答のあった119名である。

因子分析により、「好感度」「対人関係の印象」「生活態度の印象」「情動性の印象」「活動性の印象」「感触の印象」「気性の印象」の7因子を抽出した。そして因子ごとに授業前後の得点を比較した。

その結果、①「好感度」「対人関係の印象」「生活態度の印象」「情動性の印象」「感触の印象」の5因子が授業後に、より肯定的に変化していた。また、②乳幼児との遊び体験の有無が「好感度」を高める要素として重要であると考えられた。

キーワード

子どもイメージ，高校生，思春期，保育

序 文

出生率の低下や地域交流の減少により、思春期にある子供たちも乳幼児とふれあう機会が減少してきている。そこで地域では、市町村母子保健事業の一環として、平成3年度から「思春期における保健・福祉体験事業」が実施されるようになった。この事業は厚生省児童家庭局長通知（平成3年5月2日）によれば「日常生活のなかで、乳幼児と接する機会の少なくなった思春期の児童に、乳児院や保健所等において乳幼児とふれあう機会をつくり、保健衛生制度や児童福祉制度に対する理解を深め、父性や母性の涵養を図ると共に、生命の尊厳や性に関する教育を行う」ことを趣旨と

したものである。

また学校教育では、家庭科教育のなかで保育や母子関係に関する教育が行われている。そして現在、それぞれの分野で個々に思春期の子供たちに対する取り組みが行われており、地域保健と学校教育との連携が試みられてもいる¹⁾。

そこで今回は、「思春期における保健・福祉体験事業」の対象ともなる女子高校生に対して、高等学校の保育に関する授業が与える影響を明らかにするため、「子供のイメージ」について調査を行った。

なお、家庭科（保育）に関する授業内容は表1のとおりであり、高校2年生に対して15時間程度（10月～2月）で実施されたものである。

表1 保育に関する授業の内容

テーマ	内容
1 保育の出発点	・なぜ保育を学習するのか
2 「性」について	・性の歴史性意識(男女の違い…一次性徴, 二次性徴) ・現代の性 ・性に関する問題点(中絶, 強姦, 買売春, 従軍慰安婦, ポルノ, ナンパ, なお「エイズ」については保健で扱う)
3 受精のしくみ	・ヒトとしての「性」の在り方について ・受精について ・避妊 ・妊娠の診断と人工妊娠中絶
4 結婚	・民法における婚姻 ・婚姻に関する高校生の意識
5 出産	・分娩について(しくみ・方法とその経過:ラマーズ法, 水中出産, 管理分娩, 帝王切開など) ・妊娠中の母性の健康 ・母乳
6 新生児・乳幼児の心身の発達	・新生児の特徴 ・乳幼児の身体的精神的発達(「さくらんぼ坊や」のVTRの視聴にて代替)
7 乳幼児の生活習慣と遊び	・人格の形成 ・遊びがいかに乳幼児の成長過程に大きく関わっているか
8 乳幼児の成長と家庭・社会	・親の養育態度 ・最近の母親像・父親像 ・集団保育 ・労働と出産・育児(育児休業法など) ・少子社会への対応

研究方法

1. 対象：T高等学校の普通科2年生女子157名中、調査に協力が得られ、保育の授業の開始前と終了後の2度の調査用紙の照合が可能であり、全質問項目に回答のあった119名

2. 調査の内容：調査内容は、①子供に対するイメージ、②乳幼児との遊び体験の有無、③授業についての簡単な感想（自由記載）であった。

イメージについての調査はOsgood, C. E.の考案によるSemantic Differential Method (SD法)²⁻³⁾を用い、項目は井上・小林⁴⁾が子供観の測定に有効であるとした51組の形容詞対(表2)に7段階の評定尺度を設け、その値を尺度の得点とした。得点が高いほど、より肯定的なイメージと捉えられる。

3. 調査方法：調査は保育にかかわる授業の開始される前である10月と終了時の翌年2月に無記名で行った。

調査用紙を家庭科担当教諭が配布し、回収した。用紙には生徒自身が決めたマークを記入してもら

い、前後の調査で照合できるようにした。

4. 分析方法：授業開始前の結果を因子分析し、抽出された7因子(26項目)について授業前後の得点を比較した(t検定)。

また、乳幼児との遊びの体験の有無により対象を2群に分け、抽出した因子毎に両群の得点を比較した(t検定)。

結果

1. 子供イメージの因子(表3)

調査した51対の形容詞について因子分析(主因子法)を行い、バリマックス回転により因子負荷量の2乗和が1.4以上の7因子を抽出した。そして、因子負荷量0.45以上の項目(26項目)を抽出し、それぞれの因子を「好感度」「対人関係の印象」「生活態度の印象」「情動性の印象」「活動性の印象」「感触の印象」「気性の印象」と命名した。

なお、この7因子の累積寄与率は34.06%であった。

因子分析により抽出した7因子の得点を見ると、授業の前と後の両者が肯定的と見る4以上のもの

表2 子ども観の測定に有効な形容詞対 (井上, 小林による)

No.	形容詞対	No.	形容詞対
1	明るい - 暗い	26	かわいらしい - にくらしい
2	やわらかい - かたい	27	のんびりした - こせこせした
3	暖かい - 冷たい	28	勇敢な - 臆病な
4	積極的な - 消極的な	29	優しい - 厳しい
5	強い - 弱い	30	丸い - 四角い
6	静かな - うるさい	31	強気な - 弱気な
7	陽気な - 陰気な	32	思いやりのある - わがままな
8	活発な - 不活発な	33	外向的な - 内向的な
9	好きな - 嫌いな	34	清潔な - 不潔な
10	良い - 悪い	35	元気な - 疲れた
11	親切的な - 不親切的な	36	幸福な - 不幸な
12	鋭い - 鈍い	37	敏感な - 鈍感な
13	気持ちのよい - 気持ちのわるい	38	はげしい - おだやかな
14	頼もしい - 頼りない	39	楽しい - 苦しい
15	たくましい - 弱々しい	40	速い - 遅い
16	まじめな - ふまじめな	41	きれいな - きたない
17	愉快的な - 不愉快的な	42	やさしい - こわい
18	安定した - 不安定な	43	広い - 狭い
19	おしゃべりな - 無口な	44	すばやい - のろい
20	きちんとした - だらしない	45	豊かな - 貧しい
21	素直な - 強情な	46	はっきりした - ぼんやりした
22	責任感のある - 無責任な	47	新しい - 古い
23	落ち着いた - 落ち着きのない	48	まとまった - パラバラな
24	理性的な - 感情的な	49	あついで - つめたい
25	意欲的な - 無気力な	50	優れている - 劣っている
		51	生き生きした - 生氣のない

井上正明, 小林利宣: 日本におけるS-D法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観, 教育心理学研究, 33(3), 253-260, 1985. による

表3 各因子に含まれる形容詞対と負荷量

因子	因子名	形容詞対	負荷量	
因子1	好	好きな-嫌いな	0.8320	
		かわいらしい-にくらしい	0.7806	
		愉快的な-不愉快的な	0.6771	
	感	楽しい-苦しい	0.6225	
		生き生きした-生氣のない	0.6006	
	度	良い-悪い	0.5882	
		明るい-暗い	0.5128	
		気持ちのよい-気持ちのわるい	0.4876	
因子2	対人	思いやりのある-わがままな	-0.7374	
	関係	やさしい-こわい	-0.7248	
	による	優しい-厳しい	-0.6029	
	印象	親切的な-不親切的な	-0.5371	
因子3	生活	まじめな-ふまじめな	0.6973	
	態度	頼もしい-頼りない	0.6408	
	の	たくましい-弱々しい	0.6146	
	印象	安定した-不安定な	0.5537	
		きちんとした-だらしない	0.5064	
因子4	情動性	落ち着いた-落ち着きのない	-0.7358	
		責任感のある-無責任な	-0.6081	
	印象	理性的な-感情的な	-0.4780	
因子5	活動性	陽気な-陰気な	0.6872	
	の印象	活発な-不活発な	0.5926	
因子6	感觸の	暖かい-冷たい	0.7199	
	印象	やわらかい-かたい	0.6774	
因子7	気性の	印象	強気な-弱気な	0.7249
		印象	はげしい-おだやかな	0.5178

は「好感度」「対人関係の印象」「活動性の印象」「感触の印象」「気性の印象」の5因子であった。一方、否定的と捉える4未満のものは羨と関わりが深いと考えられる「生活態度の印象」「情動性の印象」の2因子であった。

2. 授業前後の子どもイメージの変化 (表4) (図1)

因子分析により抽出した上記7因子について、

因子内の項目の平均点を各因子の得点とし、授業前後の得点を比較した。

その結果、「好感度」(p<0.05), 「対人関係の印象」(p<0.001), 「生活態度の印象」(p<0.001), 「情動性の印象」(p<0.001), 「感触の印象」(p<0.001)の5つの因子で授業後に有意に得点が高くなっていた。

また「生活態度の印象」として抽出した5項目

表4 授業前後の因子の得点の比較

	前		後		n=119		
	平均	SD	平均	SD	平均値の差	t値	p値
好感度	5.55	0.86	5.69	0.59	0.14	-2.594	0.011 *
対人関係による印象	4.33	1.01	4.73	0.91	0.41	-4.515	0.000 ***
生活態度の印象	3.38	0.93	3.80	0.91	0.42	-4.835	0.000 ***
情動性の印象	2.52	0.91	2.97	1.01	0.45	-5.193	0.000 ***
活動性の印象	5.74	1.03	5.85	0.91	0.11	-1.002	0.319
感触の印象	5.85	1.00	6.22	0.72	0.37	-3.907	0.000 ***
気性の印象	4.63	1.06	4.79	0.96	0.16	-1.482	0.141

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

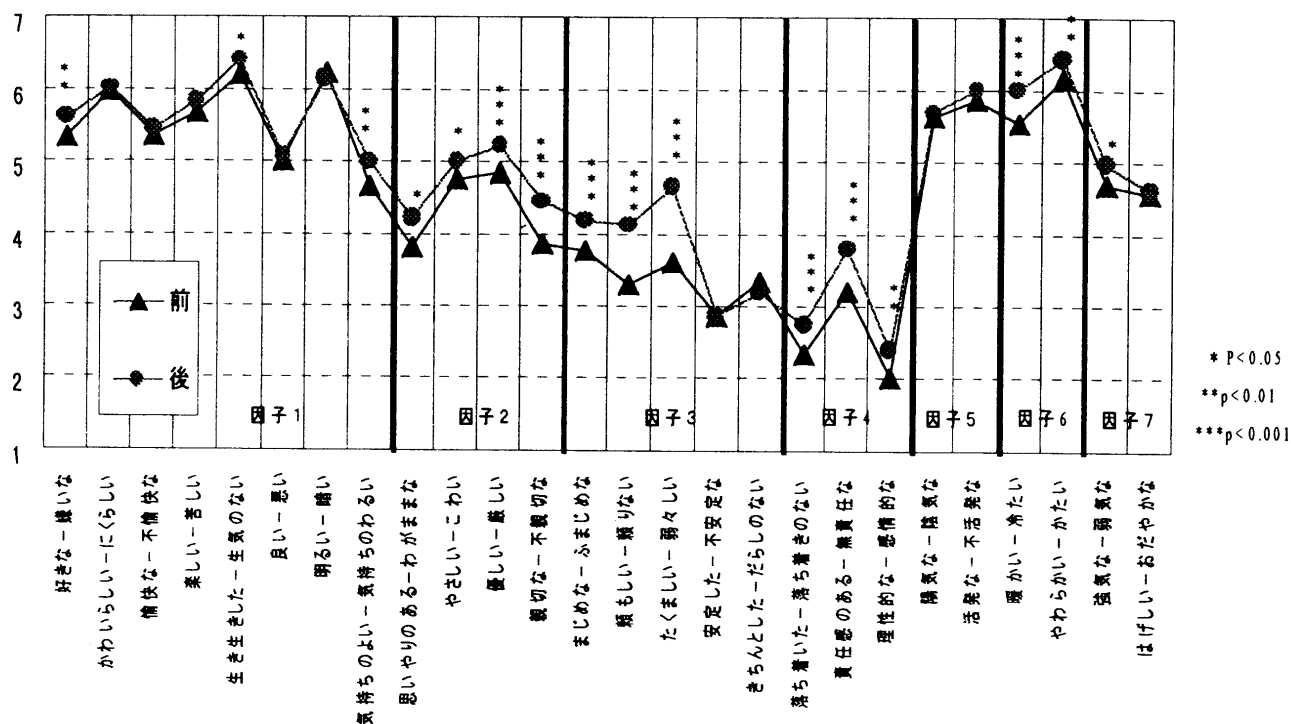


図1 授業前後の項目別平均値のプロフィール

のうち3項目(まじめな-ふまじめな, 頼もしい-頼りない, たくましい-弱々しい)では, 授業後にイメージが否定的から肯定的なものに変化していた。

3. 高校生の乳幼児との遊び体験

子供との遊びの体験は93名(78.2%)のものに, 有り, 無いものは26名(11.8%)であった。

4. 遊び体験の有無別イメージの比較(表5)

遊び体験の有無により2群に分けて各因子の得点を比較した。

その結果, 授業の前と後の両方において遊び体験の有る群が, 「好感度」において得点が高く有意な差があった($p < 0.001$)。

5. 主な感想(表6)

授業後の調査の感想欄にはほとんどの生徒が記入していた。

主な内容は, 子どもの能力についてのもの, 子どもの虐待について感じたこと, 自分が母親となっていくことについて記載したもの, 自分の生育過程を想起したもの, 子どもに対する認識の変化に関するものなどであった。

ほとんどの内容は授業や子ども, 育児について肯定的な感想が述べられていたが, 一部「ひとの育児を心配するくらいなら自分の育児を心配しろと言いたい, 子どもをどう育てようとその親の勝手であり, 欲しい人だけが育児書を買えば良い」というものもあった。

表5 遊びの体験別イメージの比較

		体験有 n=93		体験無 n=26		t値	p値
		平均	SD	平均	SD		
好感度	前	5.73	0.75	4.92	0.94	4.580	0.0000 ***
	後	5.86	0.67	5.10	0.82	4.839	0.0000 ***
対人関係による印象	前	4.37	0.87	4.16	1.41	0.923	0.3577
	後	4.81	0.86	4.46	1.05	1.720	0.0881
生活態度の印象	前	3.41	0.90	3.25	1.03	0.750	0.4548
	後	3.86	0.86	3.58	1.04	1.393	0.1664
情動性の印象	前	2.51	0.85	2.55	1.10	0.226	0.8212
	後	3.02	1.02	2.78	0.97	1.054	0.2939
活動性の印象	前	5.75	1.04	5.71	0.99	0.180	0.8573
	後	5.89	0.92	5.71	0.89	0.871	0.3857
感触の印象	前	5.87	1.01	5.77	0.98	0.431	0.6671
	後	6.24	0.71	6.15	0.76	0.520	0.6041
気性の印象	前	4.59	1.02	4.77	1.20	0.757	0.4504
	後	4.75	0.94	4.92	1.06	0.797	0.4271

*** $p < 0.001$

表6 主な感想

分類	主な内容
子どもの能力に関するもの	<ul style="list-style-type: none"> ・子供はすごい力を持っていると思う。 ・多くの可能性を秘めている不思議な存在 ・小さな子供達には私たちよりも優れている面がいっぱいありました ・たった1年でこんなにも成長するものなのだった ・子供たちにはいろんな能力があることに驚き、成長の早さに驚いた
子育ての環境に関すること	<ul style="list-style-type: none"> ・親や周りの人は子どもが自由にのびのびできる環境をつくるのが大切 ・子どもがやりたいことを子どもにやらせるべきだ ・大人が子どものできることまでその芽をつんでいと思った ・最近の子どもは塾などへ行って遊ぶことが少ない ・良い環境とは友達がたくさんいるところで自然に親しみながら育ていけることである ・子どもが育つ環境の大切さがわかった ・子どもにとって暮らしやすい地域社会をつくっていかなければならない ・父親が子育てに参加すれば母親のイライラも減ると思う
子どもの虐待について感じたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・自分も子どもに手をだすと思う。(そういえば自分もよくたたかれた) ・幼児虐待の母親と同じような心境が自分にもあったかもしれない ・虐待の話を知ると自分もそんな母親になるのではないかと不安になった
自分が母親となっていくことについて	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもを持つようになったら広い心で接していきたい ・子どもができたらずばらしい母親になりたい ・育児は楽しんでがんばりたい ・私は自分の子どもにお母さん大好きと言われればそれでよい ・子どもを産んだら仕事を続けるかすごく悩んでいる ・父親と一緒に子育てをしていきたい ・自分が人間であることがすごく嬉しくなった。 ・早く子供を産んでこんなすばらしい命を育てていきたい ・子どもをできるだけ自由に育ててやりたい ・子どもに対して私達はある程度責任を持たなければならない ・大変だろうけれど人生において出産、子育ては素敵なことだと思った ・ドーンと構えて見守ってやる母親になりたい ・広い心をもって子どもに対応できる母親になりたいが、実際に育児をしてみないと本当の大変さはわからないだろう ・心の持ち方で子育ても楽しくやれるようになるのではないと思う ・自分の赤ん坊と会るのが楽しみ ・結婚観、育児観を育てていきたい
自分の生育過程を想起したもの	<ul style="list-style-type: none"> ・そういえば私もよく母親にたたかれた ・自分が育ってきたようにこどもものびのび育てたい ・自分の母親の「あなたたちを産んで良かった」という言葉を聞くとやはり母親になりたいと思う
子どもとの接触体験について	<ul style="list-style-type: none"> ・小さい子どもに接したことが無いので、育てることなんて全く見当もつかない ・赤ちゃんにさわったことがないのでとても不安 ・親戚の子が1歳だがとてもかわいい
子どもに対する認識の変化に関するもの	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもはわがままなものだと思っていたけれど、ちゃんと人をいたわる心を持っているのだと思い感動した ・子どもはうるさくてわがままで生意気だと思っていたが、案外かわいいものだった ・自分で子どもを育ててみたいと思うようになった ・明るいイメージばかりで子どもをほしいと思っていたけれど、かわいいという気持ちの大きさだけでは子育てはできないということがよく分かった ・もっと子どもについて知りたいと思うようになった ・出産や子育ては思っていたよりずっと大変だとわかった ・若い母親にあこがれていた自分を甘いと思った ・子どもをおもちゃのように考えていた自分に気づき反省した ・保育を習って、とにかく子どもはかわいいものだった

考 察

1. 保育に関する授業の女子高校生に対する影響

花沢は⁷⁾育兒動機得点を青年期各群(中学生・高校生・大学生・助産学生)で比較し、育兒動機得点の変化には年齢的要因と赤ちゃんへの関心度が影響するとしている。そして、赤ちゃんへの関心度は、女性の場合は実生活におけるさまざまな体験や社会的要請によって、一般に年齢とともに亢進するものであり、それに伴って青年期であっても、育兒動機が高まっていく様相がその研究の中で明らかになったとしている。

今回の調査では授業の後で、子どものイメージが、より肯定的に変化しており、特に「対人関係の印象」「生活態度の印象」「情動性の印象」「感觸の印象」での変化が大きかった。感想の中にも「子どもはわがままなものだと思っていたけれど、ちゃんと人をいたわる心を持っているのだと思いき感動した」、「子どもはうるさくてわがままで生意気だと思っていたが、案外かわいいものだと思った」「子どもはだんだんと思いやりの心や優しさを身につけていきすごいと思った。しかしそれは友達の大勢いるところで自然に親しみながら成長できる環境が大切だと思った」「保育を習って、とにかく子どもはかわいいものだと思った」などの記載があり、上記の変化は、授業の効果とみることができる。その他、「明るいイメージばかりで子どもをほしいと思っていたけれど、かわいいという気持ちの大きさだけでは子育てはできないということがよく分かった」など、あこがれとしてのイメージを現実のものとして捉え直す記載もあった。

したがって、現実を踏まえながら高校生の子どものイメージが肯定的に変化するような保育の授業が展開されるならば、保育の授業によって、赤ちゃんへの関心度を高めることが可能であろうと考える。単に年を重ねるだけではなく、意義のある体験を重ねることが重要である。そのためにも学校における授業という体験の内容を吟味していくことが望まれる。

2. 高校生の乳幼児との接触体験と乳幼児のイメージ

「乳幼児接触体験の多いものは、対兒接近感情が高得点であった」^{6~7)}との報告があり、看護学生に対する調査でも、子ども観の育成に関係が深いものとして、「子どもを好きな学生は子どもの特性を肯定的に評価し、嫌いな学生はそれを否定的に捉えるといった情動性と子どもと親しく関わった経験の有無」⁸⁾が報告されている。

今回の調査では、子供との遊びの体験は78.2%のものにあった。また、この学年の生徒達に対して家庭科教諭によって行われた乳幼児の世話についての調査では、おんぶやだっこの体験は74.5%のものにあり、おむつ交換の体験は12.1%、授乳の体験は27.4%、離乳食を食べさせた体験は22.3%であった。しかしその体験の仕方は、だっこやおんぶについてみると「かなりある」者は14.6%、少しある者が59.9%であり、内容としては単に子供に触ったことがあるという程度のものであると考えられる。つまり、世話をするという事についての接触は少ないが、子供に触れるということについては何らかの形で体験している者が多いと言える。

また、今回の調査でも「好感度」において、遊びの体験の有る群の方が高い得点であった。このことから、たとえ浅い接触体験であっても子どもと直に触れる体験があることの重要性が伺える。

また上記の家庭科教諭の調査では、だっこやおんぶの体験のない高校生は25.5%であり、今回の調査では子どもとの遊びの体験のないものは21.8%であった。感想でも「小さい子どもに接したことが無いので、育てることなんて全く見当もつかない」「赤ちゃんにさわったことがないのでとても不安」などの記載があり、このような乳幼児との接触体験のない高校生に対しては、意図的に乳幼児との接触体験の機会を作る必要があると考える。

今回の調査では、子供に対する「好感度」を高めるためには、乳幼児との遊びの体験がより重要であった。しかし、「対人関係の印象」「生活態度の印象」「情動性の印象」「感觸の印象」の因子については、校内における授業でも肯定的に変化させることは可能であると考えられた。

よって、思春期における保健・福祉体験事業な

どによって乳幼児との接触体験を増やすことは子供に対する「好感度」を高めるために重要であり、学校の授業は子どもの特性を肯定的に理解していくために重要であるといえる。

そして、地域保健事業と中学校や高等学校の授業との連携が密になされるならば、より効果的に授業や事業が展開されるであろう。

今後、保健・福祉・教育の連携が更に密になされることを望みたい。

結 論

今回の調査において、女子高校生の子供イメージとして「好感度」「対人関係の印象」「生活態度の印象」「情動性の印象」「活動性の印象」「感触の印象」「気性の印象」の7因子を抽出した。更に保育の授業前後と乳幼児との遊びの体験別に得点の比較を行った結果、以下のことが示唆された。

①保育の授業により高校生の子どもイメージは、肯定的に変化する。

②乳幼児との遊びの体験の有無が「好感度」を高める要素として重要である。

文 献

- 1) 田村須賀子, 明官教子, 村山正子: 「中学生の赤ちゃんとふれあい体験学習事業」を組み入れた母子保健活動, 富山医科薬科大学看護学科紀要, 3, 59-67, 1996.
- 2) 岩下豊彦: SD法によるイメージの測定, 川島書店, 東京, 1983.
- 3) 神宮英夫: 印象測定の心理学, 川島書店, 東京, 1996.
- 4) 井上正明, 小林利宣: 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観, 教育心理学研究, 33(3), 253-260, 1985.
- 5) 花沢成一: 母性心理学, 97-99, 医学書院, 東京, 1996.
- 6) 岩田銀子, 武藤理香: 中学生・高校生・大学生の母性意識の発達—母性性を発達させる要因—, 第24回日本看護学会集録(母性看護), 5-7, 1993.
- 7) 花沢成一: 母性心理学, 103-105, 医学書院, 東京, 1996.
- 8) 木村留美子: 子ども観の研究(1)—SD法による短期大学生の子どものイメージについて—, 日本看護科学学会誌, 12(1), 50-56, 1992.

The Influence of the Classes about the Child Care on the Child Image in the Female High School Students

Yasuko SUMITANI¹, Yuchi NARUSE² and Masako MURAYAMA²

¹Graduate School of Nursing, Toyama Medical and Pharmaceutical University

²School of Nursing, Toyama Medical and Pharmaceutical University

Abstract

The purpose of this study was to clarify the influence of classes about child care in students' child image. The objects was 157 female students of a general course, the 2nd grade of the high school. Questionnaires about child image using Semantic Differential Methods, was undertaken before and after the classes. and 119 objects (75.8%) filled questionnaires completely. From the questionnaires done before the classes, 7 factors of child image were extracted by the factor analysis, named "good feeling", "impression of personal relationship", "impression of life attitude", "impression of sympathy", "impression of child activity", "impression of touch" and "impression of temperament".

The results were as follows;

1. Five factors, "good feeling", "impression of personal relationship", "impression of life attitude", "impression of sympathy" and "impression of touch", showed significantly higher scores done after the classes than the before, and those changes were affirmative.
2. The objects of positive past experience of play with child showed significantly higher score of "good feeling" than the others, and that suggested that this experience was an important element for child image.

Key words

child image, high school student, child care